

法隆寺金堂壁画の再現模写

昭和の再現模写

法隆寺のご本尊を安置する金堂の内部に描かれた壁画は、その圧倒的な芸術的価値により古くより劣化防止と保存の対策が検討されてきました。1939（昭和 14）年には法隆寺壁画保存調査会が設置され、翌年には壁画保存のための模写が国家事業として開始されました。しかし、1949（昭和 24）年、法隆寺金堂は火災に見舞われ、壁画の中でも大きな面積を占める外陣壁画 12 面が焼損しました。焼損した壁画は同じく焼損した建築材とともに収蔵庫に別置保管されています。模写事業は未着手の壁画を残し、完成を待たずして火災により原本そのものを失ってしまいました。

その後、1967（昭和 42）年から法隆寺金堂壁画再現模写事業が開始され、日本における文化財保護の歴史は連綿と受け継がれてきました。東京藝術大学名誉教授であった安田韋彦、前田青邨が総監修を務め、平山郁夫をはじめ東京藝術大学の教員や出身者が多く従事し、写真を印刷した特注の和紙に彩色する迅速な模写方法により、外陣壁画 12 面と内陣壁画 20 面の模写が完成し堂内に納められました。現在も法隆寺金堂内部には昭和の再現壁画が配されています。

平成の再現模写

東京藝術大学では、伝統的な模写技術と審美眼をベースに写真印刷を組み合わせた昭和の再現模写を発展させ、高精度なデジタル画像処理・印刷技術を融合させた新たな文化財複製技術を開発し、改めて法隆寺金堂外陣壁画 12 面の再現に挑みました。

焼損前に撮影されたガラス乾板やコロタイプ印刷はもちろんのこと、鈴木空如らの模写やあらゆる美術史資料をもとに、すべての壁画資料をデジタル化し画像を統合しました。デジタル上での作業は伝統的な模写の弱点である図様の正確さや時間の短縮を生む反面、制作工程や描画技法が継承されない懸念があります。しかし、画像の編集と印刷のみをデジタル技術に頼り、それ以外の質感再現や彩色仕上げは伝統的な方法を用いることで模写技術は継承されつつ、さらに、昭和の再現模写において発生した作業者の技術差や感覚差による完成模写の審美的差異を限りなく少なくすることが可能となりました。

東京美術学校から受け継がれてきた「伝統」に「現代」を織り込んだ制作技術を用いることで、わずか半年の期間で 12 面の再現壁画が制作され、コピーやレプリカ概念を超越した新たな模写（クローン文化財）によってかつての金堂壁画が甦りました。



彩色仕上げ

令和の再現模写 ～模写からスーパークローン文化財へ

法隆寺金堂壁画再現模写完成から 40 年が経過した現在も日本における文化財保護の歴史は連綿と続いています。東京藝術大学で開発された芸術と科学技術の融合から生まれた新たな価値を創造するスーパークローン文化財により、焼損した時よりもさらに時代を遡り、色彩豊かな壁画の再現に挑戦しています。